

合同句集

待兼山

第二集

待兼山俳句会



合同句集

待兼山

第二集

待兼山俳句会

合同句集

待兼山

第二集

序

浪高俳句会が浪高七十五年祭を記念して合同句集「待兼山」を出版してから早くも九年を経過した。その間にかつて句会のお世話をされた元浪高同窓会長河野ふくを氏をはじめ多くの会員を失った。会員の減少に伴い平成十三年より同じ待兼山に学んだ大阪大学の卒業生も会員に加え、また会の名称も「待兼山俳句会」に改称した。現在会員は二十九名を数え、毎月第三月曜日に大阪倶楽部で例会を行う他、第五日曜日のある月には吟行を開催して活発な活動が続けている。会のお世話も故河野ふくを・井上浩一郎・故河盛泰三各氏より阪本ゆたか・鶴岡言成・田中嵐耕各氏へ、さらに昨年からは嵐耕氏の外鈴木敏夫・山戸暁子の各氏に受け継がれている。なお選者としてご指導をいただいた俳誌「未央」前主宰吉年虹二氏が健康ご不調のため、昨年からホトトギス誌の主力同人である長山あや氏に選者としてご指導いただいている。

この度平成二十二年に浪高八十五年祭を迎えるに当たり、合同句集「待兼山」の第二集を上梓する事になり、浪高俳句会の前身浪高俳句教室の第一回より出席させていただいている筆者に一筆を依頼された次第である。

わずか五・七・五と言う簡単な詩でありながら、俳句はまことに奥の深い文学である。俳歴五十年に達する筆者にしても、加齢のせいもあってその秀峰の裾野で喘いでいる次第である。幸い近々五百回を迎えんとする待兼山俳句会と言う良き道場において、会員の皆さんと共により素晴らしい一句が得られるよう努力を重ねたいものである。その伝統を若い後続の諸氏に伝え、さらに本会がますます隆盛に導かれて行く事を祈念してやまない。この句集がその一里塚となれば望外の幸せである。

平成二十一年十月

待兼山第二集

序 林直入

上田元彦

笠学

林直入

片岡京子

吉年虹二

川崎香月

長山あや

河盛泰三

赤井よしを

久保井亮

有馬健馬

斎藤義雄

井上浩一郎

佐伯箕川

岩田みのる

佐伯道子

阪本ゆたか

東野太美子

鈴木敏夫

平井瑛三

鈴木輝子

前田草机

瀬戸幹三

三宅洛艸

田中嵐耕

山口貴史

坪井すみを

山戸暁子

鶴岡言成

寺岡翠

あとがき

◆世話人

西村浩風

田中嵐耕

根来真知子

山戸暁子

根来真知子

鈴木敏夫

題字揮毫

故河野ふくを

無題

林 直入

コーヒーの香ぐはし寒の水甘し
寒釣と言ふ哲学に似たるもの
雀の巢声して所在不明なる
松原を守り継いで来し蟬の音も
毎年の同じ草なり掃苔す
燃え出せば燃え止まざりし葉鶏頭
禿山と言へどやつぱり秋の山
刈られある萩も旧家としての嵩
狐火やカーナビになき山の道
熱爛と言ふは甚だ冷め易く
造花めき造花にあらず寒牡丹
鐘撞けば亀の鳴くなり天王寺
一夜さの嵐赤潮消えてゐし
抑揚も区切もなかり地虫鳴く
落鮎にまだまだ遠き日本海
冬ざるる文塚てふも石一つ

寒明けが寒さの底と言ふ皮肉
猫柳夕日に色を得たりけり
具会一処とある碑花の下
掌の蛍生命線を辿り翔つ
峽に風豊かや稲も風媒花
大文字の見ゆ下宿とは羨まし
作り滝とは滝風の無かりけり
木枯と書けば凧より厳し
古墳ともさにあらずとも冬ざるる

悴みし手も温みゆく足湯かな
お年玉両手に受くと言ふ寐
また一人蜂の刺せしと養護室
ソーダ水昭和の色でありにけり
葛の上を葛また蔽ひ真葛原

林隆夫 直入

大正十五年十月大阪生・旧制浪速高・東大農芸化学科卒

吉原製油、鐘紡勤務後、食品コンサルタントとして林食品技術士事務所設立、平成七年廃業。

句歴 昭和三十三年より桐の葉・ホトトギス・九年母・諷詠・山茶花に拠る。

現在ホトトギス・山茶花同人。日本伝統俳句協会評議員

待兼山俳句会選者

俳号の由来 祖父の雅号を借称す。

亀鳴く

吉年虹二

一輪に一問一答寒椿

呂と律の水音に添ひ青き踏む

心中の宮とは知らず恋の猫

亀鳴いて晩鐘長く余韻ひく

草笛を吹きて旅情の名残りとす

雨足の白より白し沙羅の花

折りしもの風に乗りたる草矢かな

一雨得て確かにしたる星月夜

太陽へ赤き尾を立て秋あかね

浮寝して濠一枚の鴨日和

傾ける日に綿虫の染まりとぶ

電飾に雁字がらめの枯木立

雁風呂を焚きて傘寿をよろこびぬ

朝寝して天気晴朗ありにけり

隠し味ワインと知りぬ釘煮かな

粽あり菖蒲酒なき片手落ち

黒潮に生れ黒南風の吹く暗さ
風鈴に陸奥みちのくの音江戸の音
秋郊へ一日周遊切符買ふ
電線に帰燕の会議尚つづく
蓮の実のとぶせつかちとおつとりと
散るものは散る明るさに神迎ふ
滝涸れて風音ばかり落ちにけり
芍薬のくれなる女ざかりかな
邯鄲の鳴くより闇の艶めきぬ
一院に武と文の墓義仲忌
曾根崎に月欠けて出づ近松忌
狐火といふ不確かを追ひつづく
酸素止め青水無月の山気吸ふ
閉門に間あり亀鳴くまで座る

吉年康次二虹二

大正十四年二月生・大阪府

自営業（不動産貸付管理）

句歴 五十五年 俳誌「未央」名誉主宰。ホトトギス同人。

待兼山俳句会選者

さりさと

長山あや

さりさとと薄氷にある夕ごろ
下萌や潮のごとく迫り来る
飛ぶことのうれしさうなる燕かな
陽炎といふ無きものの在りにけり
からつぼの目刺の眼仰ぐ空
蜂の翅音本の世界へ入り込む
芦屋川光りて海へ永き日を
火の色に風燃え立たせポピーの野
父の風母の風聴き夏花摘む
種といふ存在感やさくらんぼ
ひとつ蛍水鏡して二つ舞ふ
わが長き夕影くぐる茅の輪かな
雷雨を来て身の内に鎮まらぬもの
おしやべりにくたびれてゐるソーダ水
水中花ほろりと泡の独り言
苧殻鳴るかの夜の風の音させて

朝の間のしづかな香り稲の花
星流れ胸のどこかが欠けてをり
いとど跳べばその影も跳ぶ信濃の夜
雨音をいさよふ月の声と聴く
幾山河ともに越え来し月の秋
穡みな小さき影もつ日和かな
畦といふやはらかき径草紅葉
草濡れて来し夕野路の秋の声
落鮎の山河めつきりすがれけり
草原の日の香翔たせて初時雨
靡くもの刈られ風音冬ざるる
日めくりの日々を捨て来し古暦
雪の香の匂ひ立つ夜は雪女郎
心冴えて見えざるもの見ゆる真夜

長山あやゝあや

昭和十一年四月生・東京都出身・大阪大学文学部卒（昭和三十四年）

昭和五十八年より稲畑汀子先生に師事。ホトトギス同人。円虹会員。

待兼山俳句会選者

句集『芒とや』、翻訳稲畑汀子著『虚子百句』100 Works of KYOSHI

春を待つ

赤井よしを

平凡に書齋に籠り松の内
大氷柱垂れて水車の動かざる
朝の日に氷柱五色に輝やけり
竹馬の校長室をのぞきをり
春を待つ虚子の遺品の旅靴
雪間より土のつぶやき聞くところ
太陽に両手を上げて雪間草
酒断ちし夕餉は淋し若布汁
末黒野に黒き雨降る一ところ
如月の雨に明るさありにけり
ものの芽の秘めたる色を解く日なり
雑然としてゐる茶の間暖かし
暖かや石庭の石動きさう
落椿一つは遠く転がりぬ
ト口箱をこぼれし諸子端に跳ね
貝寄風やみな海に向く漁夫の墓

門前の昔のままの草餅屋
大寺の庭のしじまの雀の子
薬や千古の音のそこここに
峰寺の新樹に染まる一日かな
麦刈やめつきり減りし土の道
古町の軒から軒へ夏つばめ
病む母の食欲うれし小豆粥
どろんこと四つに組んで泥鰯掘る
下京の七日七夜の御講風

冬木中音なく疎水流れをり
初雪や六甲の風尖りたる
御堂筋枯木通りとなりけり
白き息さへ美しき京言葉
笹鳴や義士にゆかりの一寺あり

赤井義雄IIよしを

昭和六年二月生・大阪府・大阪大学法学部法学科

元職 山一証券

平成二十一年十一月二十四日逝去・遺族 赤井壽美江

昭和三十年山田不染師より手ほどきを受け句作を始む。主として高野素十師・河野静雲師の指導を受く。昭和五十二年より下村非文師・稲畑汀子師の指導を受く。昭和五十六年関西草樹会々員、平成六年ホトトギス同人、日本伝統俳句協会参与。俳号は本名をかな読み。

四季ときどき

有馬健馬

せり合つてゐる盆梅の紅と白
川曲がり岩は新樹のローレライ
葉は閉じてほのかに浮かぶ合歡の花
風無くも次々揺れる芥子の花
芥子の花風プロデュースしてをりぬ
盂蘭盆会のお供へ物を書きしメモ
床の間の塗り瓢箪も形見とぞ
落葉中早も芽の出る気配あり
マンシヨンのポットに植ゑし葱細し
山影を破りて放つ初日かな

有馬健次||健馬

昭和十九年五月生・大阪府・阪大院（工・造船学）昭和四十四年修了

元株ニチゾウテック

句歴 一年 高校より作句を自我流にて続けていたが、定年前を機会に鈴木敏夫先生に勧められ本句会に入会。俳号は大学時代に氏名より号した。

雪間草

井上浩一郎

雪間草かすかに水音ひそみるし
冷やされて暴れ牛とは見えぬかな
蓮根掘屈みなほして掴み出す
倒れ込むゝがーの厚き肩の息
重きドア開けば余寒棲みるたる
尼様に拾はれ浮かれ猫となり
木屋町の路地帰るなり春の猫
もう闇へ帰ることなし火取虫
大西瓜孕みしごとくはこびけり
着ぶくれて親鸞聖人様に会ふ
浮世やや遠ざかりつつ朝寝かな
秋の夜の言葉相寄るごとくかな
踊の手月の雫をうち払ひ
三川の淀となりゆく秋野かな
うららかや妻も手を籍す土いぢり
こころざす遥かなものや粽解く

熱爛のもう一本の話かな
杜若君が御衣の匂ひ立つ
星月夜森は獣の目を灯す
乾坤の悉皆映すとんぼの目
寒鮒の動かず人の動かざる
紅引いて踏絵に死にし女とぞ
そよ風へ小さき階段振り花
列外れてなかなか戻らざる蟻よ
あらはなるいのちに風の来る寝莫塵

隠沼や記憶のままに水の澄み
そぼ降りてより十六夜の酒となる
吹きすさぶもの胸に抱き雪女
妻にまだ頼られてゐる涼しさよ
記憶には鶏頭翳り帯びし色

井上浩一郎 二浩一郎

昭和六年八月生・大阪市・旧制浪速高等学校・京都大学法学部卒

元大阪府水道企業管理者

句歴 大阪倶楽部俳句部にて稲畑汀子先生の指導を受く。浪高先輩の林直入氏、吉年虹二氏の導きを受く。ホトトギス同人・未央同人・関西草樹会幹事。伝統俳句協会会員。俳号は本名のまま。

五月

岩田みのる

気がつけばこの年令や秋彼岸
久々の話はつきずいとどかな
蕎麦の花穂高の里の昼下り
手鏡を一寸とり出しマスクの娘
手をあげてマスクの友の近づき来
八月尽ゆつくりすすむ花時計

北国の白樺光る五月来ぬ
朱雀門ここに五月の広野かな
はや三年地震のもよほし寒の雨
溪流のルアーはたのし山女釣

岩田稔みのる

大正元年十一月生・旧制浪高五回理甲・京大工学部卒
円虹に所属

卍腰掛

上田元彦

朝市の野菜の隅の猫柳
二心無き日遙けく実朝忌
目刺干す棚延々の九十九里
散り初めし花に憂ひの無きごとし
外つ国の魚も混じりし獺祭
啓蟄やゴルフコンペの案内来る
満作や乾涸びし葉を身に纏ひ

大樟の新緑うねる鎮守かな

大池に命漲る梅雨晴間
(長居公園)

睡蓮の葉裏にのぞく鯉の口
(長居公園)

小流の谷埋め尽す七変化
(長居公園)

今宵咲く月下美人とメイユ来る
後にせるゴルフ場から閑古鳥

鮒釣りの縞蚯蚓住む井戸の端

残る蚊や勘定部屋の覗き窓
(旧吹田村)

四阿の卍腰掛小鳥来る
(旧吹田村)

爽やかやすべて捨てよと禪の寺
(旧吹田村)

怖ず怖ずと月も雲間へ大文字

装ひを黒に纏めし秋日傘

入れ食ひの戻り鯉の秋の潮

かなかなや止まりしままの観覧車

(万博公園)

足裏まで徹る月光十三夜

浄土まで銀杏落葉の並木道

透け透けの林の木々の蔦紅葉

さんざめく新成人へ月冴ゆる

不条理の渦巻く星や冬の月

散りし花ほどに山茶花咲きつづく

味噌汁へ葱を切り足す妻の留守

吹き抜けし凧のごとオバマ勝つ

一心の祈りの歩む寒念佛

上田元彦 元彦

昭和八年二月生・大阪府・阪大薬学部昭和三十一年卒

元塩野義製薬研究所員

句歴 十年余 JASS句会にて中西勲氏(山茶花編集長)の指導を受ける。山

茶花誌友。俳号は本名

JASS : Japan Association of Second Life Service

空

笠

学

作者の要望により作品の揭示を省きます。

笠学II学

昭和四十年九月生・山口県・阪大法学部平成元年卒
句歴 十五年

秋の色

片岡京子

落してはならぬハンカチありにけり
紫を極めて黒き葡萄かな
赤蜻蛉古墳の里の風に乗
り
はたはたや後ろから来る人の影
横穴の線刻壁画秋の色
貝殻を集めて引きし秋の潮
校庭の日ざし集めて芒の穂
立待の風あふれくる窓辺かな
冬黄葉石の階埋めてなほ
墨跡に蕪村忌なれば去り難し

片岡京子 京子

昭和七年二月生・旧制浪高十八回理甲一・阪大応化卒 故片岡和雄夫人。
句歴五年

国生みの島

川崎香月

三文の得薄氷を踏み散歩
淡々の月に影持つ雪女郎
被災地に雪解日和の待たれける
国生みの島の朧に海匂ふ
摩崖仏迦陵頻伽の小鳥来て
山眠り足笑ひけり径険し
時が消す浜辺の景や桜貝
回顧とは少し甘うて茅花の穂
高僧の眉にも似たり令法咲く
麦扱機音の乾いてゐたりけり
寝莫塵敷く風に藺草の香り添へ
有馬とは坂多き町汗の町
洗はれて神馬の高く嘶けり
甚平着て天衣無縫の為人
白雲の遊行始まる白露の日
ワキ役に徹して居りし酢橘の実

その香り土に賜り貝割菜
葉月潮浪速の橋の皆低し
届けらる山の便りの郁子一顆
耳遠くなりて蚯蚓の鳴くを聞く
地虫鳴く闇深ければ耳さとく
群るる鯿拒む水門葉月潮
うそ寒や抜きし齒のあと風通る
岩礁を知り尽したる根釣人
里山の王者と聳え胡桃熟れ
先客の履物揃へ十夜籠り
うそ寒のひそみるし隅うす暗く
刈り株と案山子の穴を残すのみ
義仲忌や落ちては消ゆる牡丹雪
駆け抜けてラガー童顔トライせし

川崎須美子 香月

昭和二年十月生・大阪市・旧制浪高二十二回川崎文雄の家族。

浪高俳句会で山田不染、林直入両師の指導を受く。後「未央」吉年虹二、「壺」山内年日子両氏に師事す。俳号 香月は華道御門流家元水谷紫山師より頂いたものを名乗る。

遺句

河盛泰三

つむじ風立ちもす火勢飾焚く
年豆の歳に足らざる一握り
日程を組むにゆとりのなき二月
椿活く花器を柱に茶室めき
花のやや物足らざるを見頃とす
蝶を追ふ眼のちらちらと落着かず
轉を重しと梢ゆれてをり
剪定も様になり来し自適かな
喧騒を隔て禅堂竹の春
語らひの果てのほろ酔ひ街隴
休日の行事に朝寝ままならず
殊の外雑事こなせて梅雨籠
雷鳴に杖急き足の伴はず
厚き所に栞の浅く避暑果つる
目を離す隙に開きて月見草
冷ゆるまで水掛けに掛け墓洗ふ

御僧の帰られてより盆休
息災を喜び朝の寝莫塵巻く
鹿の角切る神職の及び腰
木犀のありかを問はず楽しめり
小包の重くて栗の丸みあり
虫に耳貸して家路の遠からず
地下街にゐし小半時暮早し
搔くよりはいつそ落葉の積むままに
枯菊の棄つるを惜しむ気品あり
羽織るもの探す寒露の夕べかな
気付くまま順序かまはず冬支度
自適なる暮らしに減らぬ賀状書く
窓ガラス多彩に染めて聖樹の灯
年の市気合に負けて買ふ破目に

河盛泰三 泰三

昭和五年一月生・大阪府・旧制浪高・大阪大学法学部経済学科昭和二十八年卒

大醬株式会社元社長

俳号の由来 本名

平成二十年九月二十二日逝去 遺族 河盛泰明（長男）

正田記念庭園―師弟祈念樹―

久保井 亮

還暦の初心となりて迎ふ春
わが誓ひ新た歡喜の初明り
初日さす正田先生記念林
創立の恩師の庭の初御空
風花や記念樹光り巖と立つ
記念樹と競ひ梅林芽吹き初む
見晴るかす学問の府に梅咲けり
記念樹と競ひ芳し正田梅
巖しくも主管の誉れ青き梅
適塾も励ましありての春維新
人それぞれ花それぞれの出会ひかな
風よ吹け五月の君ら龍となれ
父と舞ふジューンブライド清らけく
種一粒光り大地に夏の雨
讃へてもなほ余りある夏木立
井戸深く暑さ沈めし西瓜割る

朝夕に記念樹を訪ふ蝉しぐれ
大地鳴り風とどろきて秋そこに
大風の吹き残しゆく秋暑し
朝日浴び箕面全山紅葉す
師を讃ふ記念樹炎ゆる紅葉かな
黄葉なす記念の木立夕日燦
幽明を分つ師弟の秋深し
応へ賜ふ日輪挑む星と月
学び舎に楷の木高く月天心
駆け抜けるタイムズスクウエア旅の秋
友 偲 ぶ 広 島 の 秋 赤 提 灯
初 雪 の 滝 の せ せ ら ぎ 箕 面 川
冬 至 る 大 変 動 を う ち に 秘 め
還 暦 の 我 を み そ な は せ 冬 木 立

久保井亮一 亮

昭和二十一年二月生・大阪府・阪大基礎工学部昭和四十三年卒

大阪大学特任教授・名誉教授

句歴 三年（阪大俳句会にて長山あや氏・鶴岡誠氏に指導を受ける）

俳号は本名から

思ひ出をたぐる

斎藤義雄

兜虫にもたまり場のありにけり
休講に寝そべる芝生春の雲
壺焼や匂ひが先に運ばれ来
躡口ひよいと顔出す茗荷の子
うそ寒や音なく開きし厨口
立冬は異国とならん旅鞆
水仙の長き影より昏れて来し
大寒や文字のかすれるサインペン
海苔搔女赤き手の平白き顔
鶯に合はせ掛け替ふ床の軸
妻と行くこの道が好き梅日和
虹鱒や番屋の狭き槽に群れ
逸品の小町すくすく青田風
作務僧の箒忙がし神迎
みちのくの日暮は早し翁の忌
狐火か小雨そぼ降る廃線路

段取りはここを先途と寒稽古
水軍の島赤潮に閉ざされし
紫陽花にふとりトマスの試験紙を
桔梗のふくらみ明日を待つ彩に
残る虫とときに音階外しをり
斑鳩へまほろばの道柿落葉
古いぬれば家が一番春炬燵
振花や素直な頃に戻りたし
道祖神はさみ棚田は稲の花
身に入むやボタンひとつをかけ違へ
露天湯に鴨の浮寝を真似るかな
冬の月だけが付き来る赴任かな
寒明や外へ出たがる旅靴
田沢湖の底深々と新樹光

斎藤義雄義雄

大正十四年一月生・大阪府・旧制浪高十七回理乙・京大医学部薬学科昭和二十三年卒

元大日本製薬(株)理事・品質管理部長、元マルホ(株)開発企画部長、元京都薬科大学講師(非常勤)

句歴二十一年 青門同人

土堤の秋

佐伯箕川

拾ひたるいのち八十路の風薫る
かなかなの声乾坤の時移す
老夫婦手をつなぎたる星月夜
大阪に生れて老いて西鶴忌
庚申の塚になきゐる地虫かな
数珠玉やお手玉好きな娘でありし
補聴器を一杯に上げ秋を聞く
落葉踏んで指揮者の如く歩みけり
一瓢の酒一串の目刺かな
浜木綿や父の哀歡今もなほ
三吉の遺愛の駒や萩こぼる
染工場ここにありけり土堤の秋
冴えに冴え言葉くぐもる露都を行く
素裸にされても冬芽用意あり
ファイナールに立つ心意気冬もみじ
総玻璃のビルに動かぬ冬の雲

下萌えの如く焦がるる事のあり
下萌えて宇宙の則の始まれる
春陰に震災句碑の崩れさう
老木の花のなどてかかく若き
春草のたけて業平通りかな
銀杏落葉ラッセルのごと踏み歩む
サンローランのハンカチが呑むこぼれ酒
虫の闇命の賛歌はた挽歌
蜂怒り匍匐の兵を刺しにけり
月下美人咲くを待つ間のさんざめき
咲き盛る萩の孕める風重き
行く秋や河内ことばのせはしなき
はぜ紅葉紅極はまりて尚散らず
満月や八十路のめをと照らさるる

ふるさと訛

佐伯道子

一団のふるさと訛花の寺
区切られし貸農園の春の土
水の如静けき火もて芝を焼く
花よりも葉のあえかにて山桜
水攻めの昔ありけり揚雲雀
滅びたる城の菩提寺牡丹の芽
かたき葉もやはらかき葉も新樹かな
草餅の濃き色を買ふ初瀬道
越の国魚沼郡の植田かな
越植田雲をふんばる媪ゐて
まくなぎや切られの与三の墓といふ
黒南風や犬吠埼の端の家
一夜さの雨あがる宿石路の花
竹皮を脱ぎそこねたる高さかな
要害といふ名の山の木下闇
時雨来て二十五菩薩ぬれ給ふ

夕しぐれ缶のジュースを猿が飲む
バラ園のバラがはみ出すフェンスかな
絢爛と今年のさくら紅葉掃く
庭の草気になる日向ぼこりかな
ビルの間に代田一枚暮れ残る
赤子抱くやうに白菜抱き帰る
閉づといふ貸農園や冬の蝶
瑞々と葱切るくりや明りかな
草枯や笑ひ地藏のとはの笑み
大家族なりしふるさと地虫鳴く
色褪せし身代り猿に冬日かな
佐渡低く横たふ海や月冴えて
ひとつ来て睫に止るあられかな
竹林のあと万博のあと草の絮

佐伯道子 道子

昭和四年二月生 旧制浪高OB 佐伯秀穂家族

俳句とともに

阪本ゆたか

若葉なか虚子の世界に入りにつけり
初時雨欲しと思ふ時こざるもの
葱の香の強き味噌汁病む妻と
父逝きし暑き日のまま古暦
鯉糶らる海の男の能登訛り
萍やその一生は水まかせ
鳴く気配ありて鶯鳴きにけり
囀りの止まればそこに大樹あり
囀りを聞きつつ源氏読み通し
今年また門火を焚きしわが齡
文字摺草心は振れをらざりし
新緑の山気にこころまで真青
賑はひし渡ししの跡や秋の声
月下美人一夜に仕事果しけり
京の町あげて合掌大文字
記念句会祝ぐすばらしき秋晴よ

浪ぎはへ鳶はひ下りる十丈余
かいつぶり横のもぐればその横も
頭まで悴み案のなきままに
下萌ゆるそこに息吹のあるごとし
風にのる寒念仏の近く遠く
虚子館の明るき若葉なりしかな
大草原雛芥子揺れて波うてり
門入れば直ぐにかぐはし夜の新樹
何をしにここに出てきて死ぬ蚯蚓

嵯峨の虫いにしへ人となりて聞く
虫の闇分つ一灯ありにけり
門火焚く美しき空に手を合はせ
花合歡のくりひろげゆくひとり旅
源平の谿の深さに合歡咲けり

阪本穰^{II}ゆたか

大正十四年三月生・大阪府・旧制浪高十六回文一・東大法卒

警察庁（福井県警本部長、福島県警本部長、警察庁首席監察官）、

総合警備保障^(株)代表取締役専務

大阪ロータリー俳句会、大阪クラブ俳句会、待兼山俳句会、関西草樹会にて
作句。

ホトトギス同人、未央投句、未央同人。

魚籠一つ

鈴木敏夫

霰跳ね犬鼻先を舐めてをり
室の花室より出でて香り立ち
薄氷を割りて小さき音を聴く
フリーズ機の揺れに香を揺らし
干されても目に光りあり目刺買ふ
蘆の角水に揺らされ水揺らし
曲水の淀みの盃や時を止め
月斗展墨色ゆたか春薫る
強情に枝張り合うてリラ咲けり
一瞬に背骨抜かるる穴子かな
磯の香の染み付いてをり穴子籠
魚籠一つ山女一尾父と子と
一面は櫛の新樹か山光る
車椅子薔薇の高さに押され行く
雉鳩の飛び込む櫛新樹かな
梅雨の空梢に一房ジャカランタ

黴の宿とまでは言へぬ湯治宿
空蟬の泥を残せし爪尖り
町屋には風の道あり水を打つ
大文字浮びし闇を鳥飛びぬ
苧殻焚くほのかに流る地の香
声のなき野鳥の園や秋暑し
横穴の闇を深めし薄紅葉
漬物の並ぶ朝市草の花
秋の潮橋下ゆるりと大型船
ペランダに出で秋の声呼び込まむ
一瞬の停止目白の黒目見ゆ
跡地には一本残り柿落葉
鴨来る木曾谷静かに暮れ行けり
鰯半身挨拶代はりと縁に置き

鈴木敏夫^{||}敏夫

昭和十六年三月生・静岡県・大阪大学工学部昭和三十八年卒

元阪大教官

句歴三年 関西草樹会、有恒俳句会にて作句、ホトトギス投句（そのほか職場の同好会で約五年間、蘇鉄の山本古瓢氏に指導を受ける）。
俳号は本名。

草青む

鈴木輝子

席たてば水仙の香のゆれ動く
モノクロの世界ほころぶ雪間より
春炬燵うすら埃の旅の本
バス停にはづむおしゃべり草青む
茅花野や子ら去りてなほ暮れなづむ
土手走る自転車軽し揚雲雀
陽炎や今日の検診異常なし
やや若きパジャマと届くカーネーション
麦飯もきびしき母も遠くなり
母の日や子の名忘れし母愛し
パラソルをたたみて海へ行く路地へ
鯉 幟 十二園 兎 は 十二人
薫風や洗ひ晒しの木綿シャツ
少しづつ抜かれ茅の輪は骨となる
その赤は悲しみの色梯姑咲く
つば広き帽子購ふ梅雨の明

ハンカチに語らせ女もの言はず
燃え尽きて苧殻は風になりにけり
門火焚くわびたきことのまた一つ
盆踊りをはれば月の高きこと
女たちしたたかに生き盆供養
虫集く母の菜園なりし庭
しんがりの客も去りたり地虫鳴く
運動会赤組旗手は車椅子
ポケットに数珠玉硬き音たつる

二人居て聞く凧や黙深し
曾根崎は欲望の町近松忌
葱刻む音沙汰なき子案じつつ
もう聞けぬ母の小言や冬の月
歌ひあげ第九終りぬ冬の月

鈴木輝子ニ輝子

昭和十七年一月生・大阪市・大阪大学文学部教育学科心理学専攻 昭和
三十九年卒

句歴七年 平成十四年五月待兼山俳句会入会。関西草樹会、有恒俳句会にて
作句。未央・ホトトギスに投句。
俳号は本名。

大きな子

瀬戸幹三

蔦青し短き道に名のありて
蚯蚓またぎ出かける朝の空広し
物言はぬ少年の部屋黴生ゆる
蛍見て帰り来る人顔やさし
玉葱をすたとんと切つて日曜日
兄弟に話題のなくて地虫鳴く
十六夜父の水飲む音のして
夜学子をむかへに来たる母と母
北山は晴れてをりけり初時雨
新聞をきれいにたたみ冬に入る
昔ばなしばかりになりぬおでん酒
小女の誰憚らぬ噓かな
幾度も歳を尋ねてお年玉
薄氷のへりは水とも氷とも
瀏静か瀬の祭の終りしか
春寒し亀裂入りたる鶴の塚

海苔炙る神事のやうな手つきして
親と子の足跡のあり猫柳
号外の配られし日や霾ぐもり
陽炎や去りゆく人か来る人か
耕人の挨拶返す声大き
座るなり海雲たのみし一人客
風光る道いつぱいにチヨークの絵
竹の秋乾きし風の吹く夕べ
遠足の列の最後の大きな子
わつといふ声のあがりて花吹雪
花疲れ遠く電車の通りけり
風来たる目玉動ける鯉幟
母の日や子の隠し持つ紙包
振花や父の話に終はりなく

瀬戸俊昭 卍 幹三

昭和二十五年五月生・京都府・大阪大学基礎工学部昭和四十九年卒

(株)博報堂 職場の「源八句会」げんぱちくかいに所属。

句歴八年 待兼山俳句会に投句を初めて四年。俳号は祖父の名より。

春眠

田中嵐耕

江戸言葉うしろに流れ川床涼み
ベビーカー天道虫のせ曳いてくる
流星群太平洋に消えにけり
ほめつつも競ふゴルフや秋日和
山上の空港にして芒原
木の実植う教頭さんの退職日
瀬を切ってたちまち消えし夏の蝶
天保山十歩で頂上冬うらら
春眠のわらべにえくぼありにけり
幾重にも幾百色の散紅葉
雛の客晴れ女とや雨止みし
春泥の人陳情に市庁舎へ
初幟空を見上ぐる日課かな
運動会行進曲も昼休み
青空の底を綱引く運動会
メールまた鮎子釘煮ありがたう

寒牡丹精一杯に耐えて咲く
やんま追ひ夕空を追ひ暮れにけり
寒鮒の釣人並ぶ黙並ぶ
なかんづく大樹の木の芽風に聞く
流星は子に見せるべし宙広し
房ゆらす風に重しと百日紅
囀の館に偲ぶ立子かな
その奥に女王蜂の在すといふ
保育所の窓開け放ち新樹晴
モノレール新樹の海をすべるかな
日蝕のことなど話し水を打つ
鉦叩話しききたく話したく
年上も年下も友夜学生
音に寄せ碎けて引きぬ秋の潮

田中豊造 嵐耕

昭和五年八月生・大阪府・旧制浪速高等学校・大阪大学法経学部昭和二十八年卒

元阪急不動産(株)専務取締役

句歴 昭和二十九年〜三十五年雲母に所属。平成九年待兼山俳句会入会。関西草樹会、有恒俳句会にて作句。未央、ホトトギスに投句。

応援歌

坪井すみを

風光る馬はいづれも毛並良き

大阪市一の高山青き踏む

よくなじむ靴の弾みて青き踏む

池広く残り鴨はた通し鴨

水亭の四簷に風の光るかな

風光る丘の上なる大風車

雨上がり早々展ぶる花筵

花冷えをいつか忘れて応援歌

爛漫の花震はする応援歌

通学の昔こんな道灼けず

道問へば被りをはづす草引女

草虱一人が取ればみなが取る

捨ててある行者の草鞋露しとど

大峰の断崖見えて鳥渡る

山祇の斎庭に草を一人引く

山頂の展望台の霧じめり

戸閉式済む大峰の秋高し
川底の石白々と水澄める
天川の秋気ふるはす大太鼓
落ちぎはに錐もみとなる草矢かな
住吉の松の影置く水温む
公園に将棋さすみな着ぶくれて
神馬舎の閉ざされしまま春を待つ
潮風に大花樗どこか揺れ
ここにまた温度計掛け避暑の坊
梅雨の蝶葉裏に羽を一文字
藍染の藍よりも濃き七変化
屋台守る悴み或は悴まず
四阿に眠気をさそふ蝉時雨
蝉の声ご神木にはなかりけり

坪井澄郎「すみを」

昭和五年二月生・奈良県・京都大学経済学部昭和二十七年卒

元(株)南都銀行、(財)南都経済センター

句歴 三十三年

「かつらぎ」にて青畝、峠の指導を受ける

俳号は本名を仮名に

星月夜

鶴岡言成

猿回し綱をゆるめて大技に
寒あやめ精一杯の花小振り
雪間とや水の惑星なればこそ
猫柳そつと触れたくなる心
光る雲翳る雲あり冴返る
穴を出し蛇の行方に道標
愛犬と愛妻乗せてヨット着く
綱引けば星屑のごと螢烏賊
青空の眩しさどこか朧なる
唯一樹異を唱へるる紫荊
草笛で呼ばれ草笛吹き返す
母ありし日には母の日覚えなく
足腰で流れを支へ山女釣る
ただ落ちる滝にいのちの形みる
辣蕪にある母の味妻の味
北極星祀り涼しき開運堂

星月夜空踏み外す星もゐて
湯の町の露草なべて色濃かり
秋の日の溢れて落ちる滝がしら
急行の通過する駅草の花
あえかなるワインの香り葡萄棚
どこを見てもなく蜻蛉睨みをり
運動会てるてる坊主留守番に
邯鄲の夜話縷々と途切れなく
禅刹といふも黄葉の堂一つ
威し銃虚しく雲のなき空へ
虫食ひの冬菜が自慢貸農園
みえ張らぬ二人の暮らし大根炊く
五座消えし道頓堀や近松忌
山茶花のこぼるる庭は掃かずおく

鶴岡誠（ごんせい）

昭和四年十一月生・大阪市・旧制浪速高等学校理科二・昭和二十七年大阪大
学工学部応用化学科卒

句歴 十二年 関西草樹会、有恒俳句会、ほか
俳号 本名由来

向日葵

寺岡 翠

子を負うて若布拾つて海苔乾して
万緑に囲まれ雨に囲まれぬ
病巣を映す画像や火取虫
荒海を傾けて鷹陸目指す
また秋に会はうと言ひつ袋掛け
名月や心の闇はそのままに
騒音も遠く茶席の杜鵑草
幾世紀経し秋の声秋の色
国を産み国を引きたる神迎ふ
夏草や悲しみを知る人となり
遺伝子を操る青き室の薔薇
霾やタクラマカンは空続き
春ともし文字も寝たがる英語本
亀鳴く夜心の鬼と酌み交す
星月夜人工衛星音もなく
かそけくも命の音す冬ざれ野

踏まれても穏やかに笑む聖母の絵
夫が居るこの当たり前薄暑かな
草の花雨の木道二人きり
励まされ慰められて草の花
夕鐘の身に入む高野一人旅
常盤木に色からませて蔦蘿
初めての貯金通帳お年玉
密やかに雪女郎恋ふ凡夫かな
薄氷を踏めばかすかに疼く音
庭の奥人目忍んで姫辛夷
初盆の多き世代でありにけり
朝日浴び加太の船団秋潮へ
遠き日よ向日葵の如き子らありき
檻樓切れに還りし案山子天仰ぐ

寺岡ミドリニ翠

昭和十五年二月生・兵庫県・大阪大学薬学部昭和三十七年卒

句歴 六年 関西草樹会にて作句。

俳号は本名由来

日本の春

西村浩風

揚雲雀ゆたけき空を疑はず
いくばくも揚らぬ湖畔諸子網
焼諸子食みつつ眺む浮御堂
囀をまなかひに聴く望遠鏡
囀や三男二女の干し物を
いかなごの釘煮自在に折れ曲り
人麻呂の駈けし阿騎野路青き踏む
畦のまた一つ減りけり芹を摘む
寺町に相撲部屋あり春灯
個室より大部屋親し春灯
治聾酒や妻と嫁とのささめごと
落雲雀高層ビルに軟着陸
だんまりの妻の不機嫌春炬燵
初午や被りて面を売る男
カルメラのふくらむさまに春の雲
空少し澱みて木々の芽吹きかな

灰汁抜きて早蕨に彩出でにけり
うららかやひしと抱き合ふ道祖神
うららかや野鳩のふくみ鳴きもして
海苔粗朶に一羽一羽のかもめ泊つ
泣き砂の浜の白さよ桜貝
降る雨の昏さとならず花ミモザ
木洩れ日を弾き返して金鳳華
サイタサイタサクラは遠くなりけり
変りなきことが倖せ花万朶

お互ひに聞く耳持たず花見酒
花有情無情の雨と寛ぎて
散りどきを考へてゐる残花かな
埒のなき夢の残りて大朝寝
鳥の巢や隣りいつまで空家なる

西村浩二浩風

昭和五年八月生・大阪府・大阪大学法学部昭和二十八年卒

三和銀行を定年退職後、鴻池合名会社に勤務。

句歴二十一年。地元結社「俳句春秋社」に拠り、ホトトギス・円虹等に投句。

平成八年から関西草樹会・大阪クラブ俳句部会員。

俳号は浩然の気を体し、本名に風を付した。

沙羅の花

根来眞知子

薄氷や言はず終ひの思ひあり
陽炎のひと遊びして去りにけり
隊商の飲み込まれゆく大陽炎
遠目にも白く燃え立つ辛夷かな
咲き急ぐ花押しとどめ今日の冷え
樟古木いま天を突く新樹なる
囀りやひとり言とも口説きとも
春深し身の奥にある重きもの
なにゆるゑの寂寥なるや春闌くる
新緑の候いつからかいつまでか
夏めくや新築の家の屋根光る
黴生ゆる無から生ぜしもののごと
ころころと笑ふ少女ら梅雨明くる
逃げてるの追ひかけてるの流れ星
打水や昼を送りて夜を迎ふ
水を打つひと日の火照り鎮めむと

天上の苑の入口合歡の花
今日ひと日あの沙羅の花この私
門火焚く来世の有無はさておいて
灯を消せば闇満たしゆく虫の声
去年逃げし鈴虫の子かあの声は
建つと言ふ噂はあれど草の花
そのつもり無くても拾ふ木の実かな
だんだんに欲張りになるきのこ狩り
天高し抱く子のまた重くなり
木枯や泣かぬ女と疎まれて
書かざりしこと二つ三つ古暦
冬ざれし野山の底にある力
日向ぼこ猫と渋茶と耳かきと
霰降る蛇の目傘ふと懐かしき

根来真知子＝真知子

昭和十六年十月生・中華人民共和国天津・大阪大学文学部昭和三十九年卒

会社員七年の後無職

待兼山俳句会七年。関西草樹会四年

薔薇咲けば

東野太美子

秋の蚊の打てばこんなに小さかり
案内乞ふ間も秋の蚊を追ひ払ふ
神主の病がちとや神の留守
薄氷に風の足跡残しをり
空輪せるアスパラガスにパリーの香
明るさに春塵隠しやうもなく
ネクタイを厭ひはじめし薄暑かな
急峻を辿りき意外に小さき滝
届けくるたび大根の太くなり
萬緑をいよよ磨きて雨激し
雨の日も香の降り来たる花棟
結界の竹の青々五月雨るる
雨上るらし夏蝶の飛び初めて
踊見る阿呆もいつか手が動き
秋の水朝の静寂を映しけり
蛍と聞きて長居をすることに

うきくさのはや育ち初む稲の丈
薔薇咲けば幸せ満ちる家に見ゆ
寒月や触るれば指の切れさうな
朝の雪もう山肌を見する午後
寒明といふかがやきの風の中
海の色残るがあはれ目刺かな
水車小屋苔むし秋の水の音
人生の小春を集ふ句会かな
冬の月地上は黒きまま眠り

慈しみ深きこころを龍の玉
次の部屋その次の部屋牡丹の香
雨意あれば重き新樹の森となる
五代目と抱き上げて見せ鯉幟
水打つて庭の呼吸の中に佇つ

東野太美子 〓 太美子

昭和十四年十二月生・大阪府・神戸女学院大学卒

旧制浪高・阪大医学部卒・故東野一彌家族

句歴 十余年 下萌句会、ロイヤル俳壇にて作句。ホトトギス同人。

音無の滝

平井瑛三

妻の絵の赤少し濃き藪柑子
音無の滝に音あり春の雨
猿肩に薄暮を帰る猿廻し
秋篠の里に天女の初音かな
初午の過ぎれば元の祠かな
寒明の山に山彦戻り来て
瀬の祭比ぶべうなき釣果かな
治聾酒に地獄耳まで願はねど
目刺かじり多喜二語りし茶碗酒
三山の 大和霞のまほらなる
壺焼の壺の奥なる磯の味
てふてふも百花に倦みて四阿に
あはあはと過ぎし青春桜貝
代搔くも植うるもありて棚田かな
考える人はブロンズ郭公啼く
百年の駅舎を洗ふ大夕立

波乗りの彼も海の子土用波
邯鄲の風に生まるる音色かな
影一つ落さぬ軽さ草蜉蝣
それなりに日々平穩や青瓢
鶏頭の真紅に愁ひなきごとく
啄木鳥の柱の穴も山家かな
淋しさを隠し味とし山の秋
姿よし声よし眼白日和よし
桜紅葉に駒脚勇む神馬かな
鳶のまた燃ゆる日待たる甲子園
凧にとさか振り立て風見鶏
二上の山やはらかき小春かな
ダム涸れて底を一縷の水の路
満ち足りし日にも懐炉を手放せず

平井瑛三 瑛三

昭和三年七月生・大阪市・大阪大学医学部薬学科

句歴 JASS 俳句会、関西草樹会、有恒俳句会

職歴 シオノギ製薬

茅渟の海

前田草机

獅子舞に小銭を入れて囃まれけり
初潮の満つるを待ちて船卸し
地獄耳とは知らず治聾酒を酌む
揚げ雲雀鳴き声残し雲に入る
眠られぬ夜のため読みし朝寝かな
リハビリの顔触れ揃ふ夏帽子
新蕎麦や鉄砲造る町に喰ふ
清正に雪洞ともし天神祭
天神の船渡御成りし氏子達
茅渟の海渡りて墓を洗ひけり
どんどこの近付くやうで遠去かる
おでん屋で再会期して復員す
地震後の花水仙の語り種
厄払ふ目出度尽しの般若湯
揚げ雲雀高きを誇るやうに鳴く
蜂の巣や匠の術に治まりし

誘蛾灯虫は三途の川渡る
揚羽蝶糸が操つるやうに翔ぶ
盆踊踏出す蹴出し揃ひ艶
桐一葉之の字に揺れて昏れにけり
駅舎古り明治を今に搔き氷
喜びの書き込みありし古曆
寒椿双掌で赤を汲みにけり
鎌倉の石段上る実朝忌
浅草に人力車あり秋の声
花冷の厳しかりけり米寿の日
常の路薄暑となりて迂回せし
鰻搔く腰の丸桶踊りゐて
春の航モーニングテイの出合ひかな
大文字余燼の処置に佇めり

前田卯一郎||草机そうき

大阪市・旧制浪高二回文乙・東大経済昭和十九年卒業

学徒出陣により海軍で軍務に付く。戦後復員し昭和二十九年防衛省で海上自衛官として勤務。昭和五十一年定年退職。今日に至る。

俳句歴は昭和三十七年「枳の芽会」同人。現在「諷詠」に投句している。

桜鯛

三宅洛艸

根切虫生きる手立てと思へども
登りつめ惑はず飛びしてんと虫
潮騒のごとく椋鳥渡り来し
発電を終へて滔々春の水
電飾の大橋はるか穴子釣る
茶問屋の茶染と見えし麻暖簾
蕎麦屋は茶鮓屋は藍の夏暖簾
火口原一木もなき草いきれ
動かずにをりし籜簀の下り鮎
橋下に住みそれぞれに冬囲
不逞の徒らしく屯す寒鴉
鯖船の一気に目指す潮境
竹馬の子に新世界展けけり
弁当を届けて妻も耕せる
荒波に揉まれ来し貌桜鯛
保育所の砂場に転ぶ雀の子

岩魚釣り猿のごとく岩伝ふ
冬ざれて行在所跡荒れしまま
薪足して人出に応ふ花篝
棚経のお茶出す暇もなく始む
水仙や昨夜の海鳴り知らぬげに
積肥の蚯蚓もろとも撒かれけり
不器用に灯に激突の金亀子
成るままに捨て置かれゐる崩れ築
雲雀野に溶けこむやうに大の字に

捨て缶に子子の国育ちをり
端居して太平楽を並べたて
有明の月冴え登頂隊の発つ
草蜚蟬草の一部となりすます
キヤンパスの広く明るく銀杏散る

三宅敏夫 洛艸

大正十年四月生・大阪府・旧制浪高十二回理甲・京大工冶金昭和十八年卒

元粟村金属工業。

大学の頃句作開始。その後五十年余中断。退任後吉永淡草氏の指導で再開。

待兼山俳句会で林直入、吉年虹二、長山あや氏らに師事し、平成七年関西草

樹会入会。山茶花同人。ホトトギスに投句。

洛南に住むことと淡草師の草の字を頂き俳号とす。

里神楽

山口貴史

人生を思ひ起こして目刺焼く

赤潮や散りしもの等の血の涙

篝火に闇を祓ひし里神楽

山霞空も草木も幻に

狐火は天より来たる星の屑

山口貴史 貴史

昭和六十年一月生・大阪府・大阪大学経済学部平成十九年卒

大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程

句歴五年 長山あや氏に指導を受ける。

露の臺

山戸 暁子

野の味はみなほろ苦し露の臺
クロツカス生まれしばかりの影を持つ
水草生ふ隠沼音を吸ひ込めり
踏青のところに足のつきゆかず
若きらに負けず春眠むさぼりぬ
春灯消したるのちのほのあかり
村中の水つながりし代田かな
十薬の十字十字や空昏し
打水をして棟梁の帰りけり
寺継ぎし乙女の声の盆読経
幽霊の今か今かと夏芝居
去年共に見し人は亡く大文字
西瓜食ぶ女なること忘れ食ぶ
荒海の船団のごと芭蕉の葉
秋暑しものの匂ひのコンコース
病む人も目覚めゐるらし虫の夜

遺産なし遺言もなし水澄めり
十六夜やきりもなき家事置くとせむ
菊 膾 陶 淵 明 の 菊 を 食 ぶ
つなぎてもつなぎても数珠玉軽し
逝きし人追ひ山茶花の散りやまず
泥鰯掘る泥鰯のやうな男かな
初時雨雲光りつつ流れゆく
報恩講理想の婆になれぬまま
半熟の卵のごとき冬日かな
目鼻口使ひ切つたる大きくさめ
通勤のバッグ小脇に葱を抱く
おでん酒先ずネクタイをゆるめけり
水槽の鮫極月の人を見る
文来たる差出人は雪女郎

山戸暁子 暁子

昭和十一年八月生・大阪市・昭和三十六年阪大文学修士

元大学非常勤講師

平成十年 円虹入会、平成十一年 関西草樹会入会、ホトトギス投句、日本伝統俳句協会入会、平成十三年 待兼山俳句会入会、平成二十年 有恒俳句会入会。

あとがき

本句集は現会員三十名の自選句に故人二名の句各三十句（原則）を合わせた合同句集である。昭和五十四年四月に浪高俳句教室を開設してから第三百十七回俳句会（平成十二年五月十五日）までの句集に続き、第二集として第三百十八回俳句会から第四百六十七回（平成二十一年九月十四日）までの約十年間の殆んどの会員三十二名が参加された。

発行の経緯は次の通りである。

（一）旧制浪高八十五年祭を記念する第二句集として旧制浪高同窓会から賛助金を頂き、平成二十二年四月の記念式典前後に発行すべく編輯にあたった。

（二）第三百二十九回（平成十三年一月二十二日）に浪高俳句会から待兼山俳句会に改称すると共に大阪大学卒業生並びにその家族にまで会員を拡大した。それ以後初めての合同句

集である。

（三）本句集上梓にあたり、選者林直入氏には序文を、同吉年虹二氏には発行所のご紹介を、同長山あや氏には全般にわたりご助言を賜った。また句集の装丁については旧制浪高同窓会副会長の鶴岡言成氏に、会員各位に多大のご支援をいただき、予定数以上の発行部数となった。又、印刷その他は株式会社明青の中村研二氏に、カバーデザインはデザイン球石塚博和氏にも終始いろいろお世話になった。

これらの方々にここに深く感謝申し上げます。

平成二十二年四月

世話人 田中豊造（俳号 嵐耕）

山戸暁子（〃 暁子）

鈴木敏夫（〃 敏夫）

合同句集 待兼山 第二集

発行日 平成二十二年四月

発行人 待兼山俳句会

〒五六一一〇八八四

豊中市岡町北二丁目十一―三

田中嵐耕方

TEL 〇六一六八五二―三四六四

制作 株式会社 明青

〒五三〇一〇〇一六

大阪市北区中崎三―一―二

TEL 〇六一六三七二―七六五二

頒価 二、〇〇〇円